１－（１）　湿地性カラー産地の維持発展に向けて

―　担い手確保・育成支援　―

活動事例の要旨

君津市の湿地性カラーは、生産者の高齢化による規模縮小や離農により、生産量が減少していた。農業事務所は産地の維持発展を目的として、担い手を確保・育成するために生産組織や関係機関と共に活動し、新規就農者が増加した。地域には研修受入施設として「カラーの里」が開設され、農地がなくても技術習得ができるようになった。また農業事務所では生産者の全戸調査を実施して産地の問題点を把握し、カラー生産の標準栽培マニュアルの作成に役立てた。今後は、就農希望者の適性把握と農地確保に向けた支援を産地とともに進める。

１　活動のねらい･目標

君津市での湿地性カラー（以下カラー）の栽培は昭和３５年頃に始まり、現在も豊富な水源とパイプハウスを利用した生産が続けられている。最盛期には面積が７．０ｈａ以上あり、東京市場の７０％以上のシェアを占める日本有数のカラー産地であった。

図１　カラー生産ほ場の様子

しかし高齢化により規模縮小やリタイアする生産者が増加しており、平成１９年以降は生産面積が１．０ｈａ以上も減少していた。

農業事務所はカラーの産地を維持するため、生産組織、君津市農業協同組合（以下ＪＡきみつ）及び君津市農政課と共に、新規就農者の定着に向けた受入れ体制作りを目標とし、次の普及活動に取り組んだ。

２　活動の内容

（１）　新規就農者への定着支援と体制作り

農業事務所では、平成２２年以降カラー生産を開始した新規就農者に対して、定期的な巡回による技術、経営支援を始め、経営改善に向けた各種県単事業の導入支援を行い、定着を図ってきた。

そして、君津市への新たな就農希望者が現れると、市やＪＡきみつと情報共有しながら、カラーの産地であることをＰＲし、その確保に努めていた。カラー産地としての認知度は一般には高くなく、関係者からは、さらに協調して担い手確保に取り組むことが必要だと声が上がり、平成２８年にＪＡきみつからオープンハウス「カラーの里」構想が提示された。「カ

ラーの里」構想とは、「①一般消費者が見学できるカラーの展示・販売」機能と、「②産地のカラー生産技術に必要な試作や試験を行う」機能を併せ持った生産用ハウスを設置しようとするもので、そこに「③ほ場を利用したカラー生産の研修」機能を持たせ、新規就農支援の拠点として活用しようというものであった。

「カラーの里」構想をきっかけに、生産組織や関係機関で、新規就農者支援に向けた話し合いが開始され、支援の分担を決めた。農業事務所は生産技術に関することを担うようになり、関係機関の間では、進捗や検討内容を共有する機会が持たれるようになった。

（２） カラー生産技術の現状整理と標準栽培マニュアルの作成

カラーの生産技術や産地の問題点を把握するため、カラー生産者全戸の生産管理方法や経営及び労働実態に関する調査を実施した。

また、新規参入し定着している生産者２名に、就農前の経過や就農当時の様子などの聞き取りを行った。

これらの調査結果から、多くの生産者が４０年以上家族だけで技術継承して生産をしているため、他の生産者の技術を参考にする機会がなく、管理方法の個人差が大きいこと、目標出荷本数である３万本／１０ａを達成できていない生産者が予想より多いことが判明した。

図２　カラーの出荷調整作業の様子

また、これまでの標準技術指針は、新規就農者には栽培の流れがつかみにくく、カラー生産に取り組むイメージに繋がりにくかったことも明らかになった。

以上のことから、農業事務所はカラー生産の標準技術を改めて整理し、生産者間で共有できる技術資料を作成することとし、全戸調査の中から確認した生産技術力の高い５名の生産者について、マニュアル作成のためほ場管理や水管理、採花から出荷まで一連の作業を写真や動画で記録させてもらった。併せて各生産者には、何故その作業を行うのか、作業の効果はどこに現れるのかについても聞き取りをおこなった。

３　活動の成果

（１） 研修受入施設の開設

令和元年６月に新規就農者等研修施設「カラーの里」が開設された。

ハウス内にはカラーのＰＲができるようウッドデッキが設置され、湿地性カラーの品種を見ることができる。また３連棟のハウスを建設し、内部で栽培に関する比較試験ができるよう

になり、今後は栽培管理や新品種の試作も検討している。また「カラーの里」での研修について、チラシの配付と市やＪＡきみつの広報で募集し、就農希望者が増加した。

図３　新規就農者等研修施設
「カラーの里」ハウス内部

（２）　カラー生産技術の見える化

新規就農者への生産技術資料として、カラーの標準栽培マニュアルを作成した。生産技術力の高いカラー生産者の作業を写真付きでまとめたマニュアルにより、効果的な研修ができるようになった。また、生産組合と関係機関はマニュアルに基づいて技術を共有し、研修カリキュラムにも反映できるようになった。これにより、新規就農者は作業の流れや効果を理解しながら研修に臨むことができるようになり、早期の技術習得に結びついた。

（３）　新規就農者の増加と定着

新規就農者の受入れ支援により、平成２２年から１０年間で１１名の新規就農者がカラー生産を開始した。産地の（既存）生産者数は高齢化によるリタイアで減少しているが、新規就農者が参入したことで、全体の生産者数はほぼ横ばいに維持できている（図４）。また新規就農者は水源や定植株もそのままで空きハウスを任されることが多いが、自身でも新設する例が増えてきたことから、一時期は減少した全体の生産面積も増加してきている（図５）。

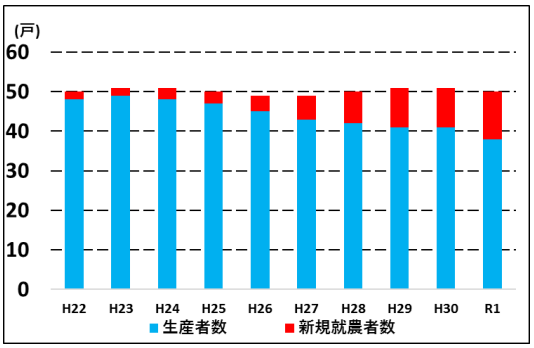

図４　カラー生産者数の推移（Ｈ２２～Ｒ１）

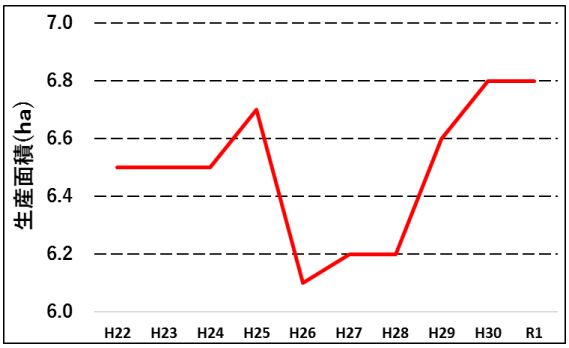

図５　カラー生産面積の推移（Ｈ２２～Ｒ１）

４　将来の方向と課題

「カラーの里」では生産者として就農を希望する人に対して、カラーの実際の農作業を１～２か月「体験作業」として設定しているが、思うように機能していない。「体験作業」は就農希望者にはカラー生産に対するイメージと実際の労働とのギャップを埋めることに繋がり、産地側にはカラー栽培の後継者としての資質を見極めることを可能にする。今後も関係機関、組織とともに「体験作業」が十分機能するよう検討を重ねていく。